

第 58 回大会を終えて

教育史学会第 58 回大会は、日本大学文理学部を会場にして、2014 年 10 月 4 日（土）・5 日（日）に実施されました。理事会・編集委員会などが行われた大会前日は、夏に戻ったような気候でしたが、一日目は曇りがち、そして、二日目は台風の影響を受けた土砂降りの雨で肌寒いほどの気候になりました。天候に恵まれたとは決して言いきれない状況でしたが、参加者総数は、351 名（うち、一般会員 246 名、臨時会員 28 名、院生会員 43 名、臨時院生会員 34 名）でした。多くの皆様に参加していただきましたこと、心より御礼申し上げます。台風シーズンの学会開催で、その襲来が最も気になっておりました。大会の前の週に関東近辺を台風が通過したこともあり、大丈夫かと思っておりましたが、続いての台風で足元が悪いのにもかかわらず、多くの皆様のご参加を得たことは、大会準備に携わった者として望外の喜びです。

会場は、日本大学文理学部としては、比較的新しい 3 号館（研究発表・コロキウム・懇親会）、と百周年記念館（シンポジウム）を使用しました。10 月 4 日が日本大学の創立記念日で休講ということもあり、発表会場の確保は、スペースの面も含めて、それなりにできたものと思いますが、その一方で、事務局が閉じている関係上、空調などでご迷惑をおかけした点が出たことは、反省すべき点であると思っております。

研究発表申し込みは、74 件でした（うち、2 名は発表辞退）。理事会の決定を受け、コロキウムを正規のプログラムの中に組み入れるという、名古屋大学における第 53 回大会以来のタイム・スケジュールを踏襲しましたが、プログラム編成には苦慮しました。計算上では、6 会場に対応できる発表者数でしたが、発表会場ごとの内容の共通性を図ろうとしたため、2 日目午前中は 7 会場とせざるを得なくなりました。その結果、一つの会場の参加者が極端に少なくなるなどの弊害も見受けられました。さらに、司会者の確保にも苦慮し、かなり強引にお願いした方々もおります。全 19 会場、38 名の司会を確保するのは、本当にきつい仕事でした。司会者を確保し終えたときは、本当にホッとしました。と言いますか、一時は、司会者未定でプログラムを印刷することも覚悟しておりました。こうしたことは、第 55 回大会の時にも指摘されておりますが、今後、シンポジウム、研究発表、コロキウム、すべてを見通したうえで、プログラム

編成のあり方を再度検討すべきではないかと、切に感じました。

シンポジウムは、「教育史は現実の諸実践にどう影響をもちうるか—教育史研究のレリバンスを問う」とのテーマのもと、260 名弱という多数の方の参加を得ました。日本大学文理学部で最も広い会議場を確保しましたが、それでも手狭な状況となり、また大学が休日ということもあり、空調などでご不便をおかけしました。教育史研究と教育実践とをどう認識して研究を進めるべきかという、「古くて、新しい」テーマだと思います。懇親会の席でも話題になっておりましたが、こうした問題を、今後にどう繋げていくのかが、大切なだろうと、改めて感じた次第です。また、教育史研究者以外の人々との対話の重要性についても、私個人としては、感じているところです。

懇親会は、125 名（含むご招待）の参加でした。一時は「大赤字！」を覚悟しましたが、皆様のご協力もあり、大きな赤字にならずに済みました。料理が不足することはなかったのがこの点は安堵しました。日本酒なども事務局長の独断で、故郷（長野県諏訪）の地酒と新潟の地酒を集めてみました。「美味しい」とのお褒めの言葉もあり、ほっとしております。何時もの悩みと推測しますが、参加者人数が読めない懇親会の設定は、気を揉む要素の一つです。今回は、発表件数から予想を立てたのですが、見積もりの難しさを実感しました。

コロキウムは、四つの企画によって行われました。正確な参加数は把握しておりませんが、台風が接近し土砂降りの中、17:30 まで参加された方は、150 名以上はおられたようです。白熱した議論の場として、広さや設備なども考慮して会場を設定したつもりではありますが、どうだったでしょうか。

日本大学には、文理学部に加え他の学部にも勤務する教員を合わせると、10 名ほどの会員がおりますが、今回の大会の準備の大方は、私のゼミに参加してくれている院生の方々に頼ることになりました。これら熱心に大会を支えていただいた準備委員会メンバーや院生・学生スタッフの方々にこの場を借りて感謝の意を表したいと思っております。

第 58 回大会準備委員会 事務局長
小野 雅章（日本大学）

総 会 報 告

2014年10月4日午後1時より、日本大学文理学部百周年記念館2階国際会議場にて第58回大会年度の総会が開催された。まず新谷恭明代表理事より、続いて大会準備委員会委員長・羽田積男会員より挨拶があった。議長団として関川悦男会員・佐藤哲也会員が選出され、議事が進行された。審議事項は全案件が原案通り承認された。出席人数は133名。

【報告事項】

1. 第57回大会年度会務報告

事務局より以下の会務報告がなされた。

- (1) 第57回大会年度中の会員異動
(2013.9.1～2014.8.31)

年度当初会員数 881名 入会数 35名 退会者数 28名 年度末会員数 888名

- (2) 第57回大会の開催

2013年10月13日・14日に、福岡大学で開催された。参加者数は235名であった。

- (3) 『会報』の発行

2013年11月25日、および2014年5月25日に『会報』を発行した。

- (4) 機関誌編集委員会選挙の実施

機関誌編集委員会選挙を2014年7月18日公示、7月28日を投票締切とし、8月8日に開票を行った。なお、結果については「報告事項2」にゆずる。

- (5) 『日本の教育史学』第57集の刊行

2014年10月1日付で発行した。発行部数1160部。

- (6) 海外特別会員の委嘱

理事会決定に基づき、Hans Martin Krämer 教授（ドイツ）並びに韓龍震教授（韓国）に対し海外特別会員の委嘱状を送付した。委嘱期間は2014年4月～2017年3月の3年間。

これにより、2014年9月1日現在の海外特別会員は、田正平教授（中国）、Richard Rubinger 教授（米国）とあわせて4名となる。

- (7) 他学会との共同

2014年3月15日開催、教育関連学会連絡協議会公開シンポジウム「教育委員会をどう考えるか-学校教育の新しいガバナンスをめぐって-」を会員に周知した。

2014年6月22日開催、教育学関連諸学会共同シンポジウム「教育研究の未来-世代と国境を越

えて-」に発表者2名を推薦、会員に周知した。

- (8) 名簿の作成

2014年11月刊行にむけ、各会員宛に名簿記載事項を確認するためのデータを送付した（会報115号同封）。

- (9) ホームページの更新

事務局移転のお知らせ／教員公募情報／教育関連学会連絡協議会主催シンポジウムのお知らせ／書評委員会内規改正／その他

- (10) 理事会の開催

第1回 2013年10月14日 福岡大学

報告事項 機関誌の印刷所について／第58回大会開催校について

審議事項 事務局長の委嘱について／選挙管理委員の委嘱について／第2回理事会の開催について／投稿要領の改正について／国際交流委員会について

第2回 2014年3月29日 立教大学

報告事項 会務報告／教育関連学会連絡協議会運営委員会、総会およびシンポジウムについて／『日本の教育史学』第57集の編集経過および研究奨励賞の選考について／『日本の教育史学』第57集の書評編集経過について／第57回大会決算報告について／第58回大会準備状況について／第59回大会開催校について／その他

審議事項 書評委員の選出について／書評委員会内規の改正について／国際交流委員会より提案事項／入会者・退会者の承認について

その他 編集委員会選挙について

第3回 2014年10月3日 日本大学

報告事項 第58回大会の準備状況について／会務報告／機関誌編集委員会選挙結果について／『日本の教育史学』第57集編集委員会報告／第4回教育史学会研究奨励賞選考結果について／『日本の教育史学』書評委員会報告／国際交流委員会ならびにワーキンググループ報告／その他

審議事項 CiNii から J-STAGE への移行について／第57回大会年度決算（案）及び監査報告について／第58回大会年度事業

計画と予算（案）について／機関誌編集委員会規程改正について／教育史学会研究奨励賞規程および内規の改正について／編集幹事の委嘱について／入会・退会者の承認／その他

2. 機関誌編集委員会選挙結果について

選挙管理委員・大迫章史会員より以下の選挙結果（書評委員については選出結果）が報告された。

■第 58・59 集機関誌編集委員

| | | |
|-------|-----|----------|
| 大島 宏 | (日) | 東海大学 |
| 川村 肇 | (日) | 獨協大学 |
| 木村 政伸 | (日) | 新潟大学 |
| 小山 静子 | (日) | 京都大学 |
| 新保 敦子 | (東) | 早稲田大学 |
| 牧野 篤 | (東) | 東京大学 |
| 小玉 亮子 | (西) | お茶の水女子大学 |
| 野々村淑子 | (西) | 九州大学 |
| 北村 嘉恵 | (一) | 北海道大学 |
| 橋本 美保 | (一) | 東京学芸大学 |

■第 58 集書評委員

| | | |
|-------|-----|------------|
| 木村 政伸 | (日) | 新潟大学 |
| 船寄 俊雄 | (日) | 神戸大学 |
| 坂本 紀子 | (日) | 北海道教育大学函館校 |
| 佐藤 由美 | (東) | 埼玉工業大学 |
| 新保 敦子 | (東) | 早稲田大学 |
| 遠藤 孝夫 | (西) | 岩手大学 |
| 宮本健市郎 | (西) | 関西学院大学 |

3. 『日本の教育史学』第 57 集の刊行について

機関誌第 57 集を担当した委員会（前田一男機関誌編集委員長）より以下の報告があった。

例年通り 9 月下旬に 57 集を刊行できた。研究論文・書評・図書紹介・57 回大会記録で構成されており、掲載論文は 8 本。投稿総数は 31 本だったが、全投稿が受理された。これは投稿時のチェックリストが奏功したものと判断される。最後に、奥付に誤植が見つかりホームページ・会報等で告知することとした。

【審議事項】

1. および 2. 第 57 回大会年度決算および監査

事務局より資料に基づいて説明があり、引き続き監査・柏木敦会員より監査結果について報告があった。審議の結果、第 57 回大会年度決算が異議なく承認された。

3. CiNii から J-STAGE への移行について

事務局より、「日本の教育史学」の電子化について以下のような提案があった。

「日本の教育史学」の電子ジャーナルについては、これまで国立情報学研究所の電子図書館事業である CiNii を活用して公開していたが、この事業が国の方針により 2016 年 3 月で終了することになった。そのため、理事会としてワーキンググループを設置して今後の方策を検討した結果、J-STAGE への移行が望ましいという結論を得、理事会として今総会に提案することとした。移行の際は、掲載範囲は「論文・書評・図書紹介・シンポジウム報告」とし、詳細については編集委員会にて検討を進めたい。

以上の提案ののち、J-STAGE 利用に係る経費の予算措置、バックナンバー収載について、他学会での活用状況などについて活発な質疑がなされた。審議の結果、J-STAGE への移行をすすめることが拍手で承認された。

4. 第 58 回大会年度予算について

事務局より資料に基づいて予算案について説明がなされ、異議なく承認された。

5. 規程の改正について

事務局より「機関誌編集委員会規程の改正」「教育史学会研究奨励賞規程の改正」の 2 点について、資料に基づき提案がなされ、異議なく承認された。

6. 第 59 回大会について

事務局より、次回第 59 回大会について宮城教育大学で開催したい旨提案がなされ、異議なく承認された。

以上をもって議事はすべて終了した。審議事項 6 を受けて、第 59 回大会開催校である宮城教育大学・笠間賢二会員よりご挨拶をいただき、閉会した。

第 57 回大会年度決算報告

収支計算書 (2013.9.1 ~ 2014.8.31)

収入

単位：円

| 費目 | | 予算 | 決算 | 差異 | 備考 |
|--------------|-------------|------------|------------|----------|--------------------------|
| 会費 | 57回年度個人会費 | 3,825,000 | 3,719,000 | -106,000 | 5000*739名 3000*8名 納入率82% |
| | 過年度個人会費 | 500,000 | 371,000 | -129,000 | 6000*11名 5000*61名 |
| | 小計 | 4,325,000 | 4,090,000 | -235,000 | |
| 機関誌等 販売収入 | 機関誌販売収入 | 210,000 | 348,570 | 138,570 | 1,944*1冊 2,646*131冊 |
| | 50周年記念誌販売収入 | 5,250 | 7,250 | 2,000 | 250*29冊 |
| | 小計 | 215,250 | 355,820 | 140,570 | |
| 雑収入 | 受取利息 | 1,200 | 1,217 | 17 | |
| | 情報・システム研究機構 | 0 | 0 | 0 | |
| | 小計 | 1,200 | 1,217 | 17 | |
| 当年度収入合計 A | | 4,541,450 | 4,447,037 | -94,413 | |
| 前年度繰越金 B | | 11,602,291 | 11,602,291 | 0 | |
| 収入総計 C=A+B | | 16,143,741 | 16,049,328 | -94,413 | |

支出

単位：円

| 費目 | | 予算 | 決算 | 差異 | 備考 |
|--------------|----------|------------|------------|------------|---|
| 大会費 | 大会運営費 | 1,150,000 | 1,150,000 | 0 | 第57回大会 (福岡大学) |
| 編集費 | 機関誌刊行費 | 720,000 | 720,000 | 0 | 第56集印刷費 (1,150部) |
| | 編集複写費 | 10,000 | 2,950 | -7,050 | |
| | 編集交通費 | 600,000 | 545,840 | -54,160 | |
| | 編集会合費 | 50,000 | 40,767 | -9,233 | 委員会昼食代@1,000 書評委員会6,000 |
| | 編集通信費 | 40,000 | 32,275 | -7,725 | 投稿案内8,880 書評委員会4,047 |
| | 編集消耗品費 | 5,000 | 7,377 | 2,377 | コピー代、マスター代 他 |
| | 編集謝金 | 100,000 | 64,000 | -36,000 | 英文校閲 @8,000×8本 |
| | 編集人件費 | 200,000 | 200,000 | 0 | |
| | 編集雑費 | 5,000 | 0 | -5,000 | |
| | 書評等原稿謝金 | 15,000 | 10,000 | -5,000 | 非会員2名 |
| | 書評用図書購入費 | 70,000 | 73,350 | 3,350 | 書評委員@10,000×7人 献本用図書3,350 |
| | 振込手数料 | 1,500 | 321 | -1,179 | |
| | 小計 | 1,816,500 | 1,696,880 | -119,620 | |
| 事務局経費 | 人件費 | 940,000 | 902,800 | -37,200 | 幹事840,000 アルバイト62,800 (紀要等発送、電子化補助等) |
| | 旅費交通費 | 700,000 | 762,750 | 62,750 | 理事会402,700 事務局引継ぎ159,970 |
| | 会合費 | 40,000 | 48,253 | 8,253 | |
| | 奨励賞関係費 | 210,000 | 108,551 | -101,449 | 第3回研究奨励賞副賞50,000*2名 賞状・式次第印刷費 |
| | 通信運搬費 | 400,000 | 569,493 | 169,493 | 会報発送費(114・115号)262,940 機関誌発送費198,040 事務局引継ぎ23,210 |
| | 消耗品費 | 60,000 | 75,742 | 15,742 | |
| | 印刷製本費 | 200,000 | 249,318 | 49,318 | 会報印刷費(114・115号)168,570 封筒印刷費70,098 |
| | 手数料 | 50,000 | 59,612 | 9,612 | |
| | HP管理運営費 | 80,000 | 80,000 | 0 | |
| | 名簿刊行費 | 240,000 | 0 | -240,000 | |
| | 小計 | 2,920,000 | 2,856,519 | -63,481 | |
| 国際化促進関係費 | 旅費交通費 | 600,000 | 162,380 | -437,620 | 会議旅費 |
| | 謝金 | 100,000 | 0 | -100,000 | |
| | 会場費 | 0 | 0 | 0 | |
| | 印刷代 | 100,000 | 0 | -100,000 | |
| | 通信運搬費 | 50,000 | 8,630 | -41,370 | 海外特別会員委嘱状送料等 |
| | 会合費 | 40,000 | 0 | -40,000 | |
| | 消耗品費 | 10,000 | 0 | -10,000 | |
| | 小計 | 900,000 | 171,010 | -728,990 | |
| 雑支出 | 雑支出 | 10,000 | 0 | -10,000 | |
| 予備費 | 予備費 | 200,000 | 35,000 | -165,000 | 過年度過納会費返金・教育関連学会費 |
| 当年度支出合計 D | | 6,996,500 | 5,909,409 | -1,087,091 | |
| 当年度収支差額 A-D | | -2,455,050 | -1,462,372 | 992,678 | |
| 次年度繰越金 E=C-D | | 9,147,241 | 10,139,919 | 992,678 | |
| 支出総計 D+E | | 16,143,741 | 16,049,328 | -94,413 | |

貸借対照表 (2014.08.31 現在)

資産

単位：円

| 費目 | | 金額 | 備考 |
|--------|------------|------------|---------------|
| 現金 | 現金 | 7,237 | |
| 預金 | 郵便振替 | 2,764,489 | |
| | ゆうちょ銀行 | 627,423 | |
| | ゆうちょ銀行定額貯金 | 5,000,000 | |
| | みずほ銀行 | 5,195,118 | 口座新規契約 |
| | 福岡銀行 | 0 | 口座解約 |
| | 西日本シティ銀行 | 0 | 口座解約 |
| | 小計 | 13,587,030 | |
| 前払・仮払 | 大会前払仮払金 | 1,150,000 | 第58回大会 (日本大学) |
| 立替・未収金 | 機関誌等販売収入 | 355,820 | 日本図書センターより売上金 |
| | 機関誌編集経費未精算 | 119,832 | |
| 資産総計 F | | 15,219,919 | |

負債・積立金および繰越金

単位：円

| 費目 | | 金額 | 備考 |
|---------------|-------------|------------|------------|
| 前受金 | 58回年度会費 | 70,000 | 5000*14名 |
| | 59回年度会費 | 5,000 | 5000*1名 |
| | 60回年度会費 | 5,000 | 5000*1名 |
| | 小計 | 80,000 | |
| 積立金 | 将来計画積立金 | 5,000,000 | ゆうちょ銀行定額貯金 |
| 負債・積立金合計 | G | 5,080,000 | |
| 第58回大会年度への繰越金 | $H = F - G$ | 10,139,919 | |
| 負債・積立金・繰越金総計 | $G + H$ | 15,219,919 | |

会計監査報告

第57回大会年度会計につき監査を実施し、収支決算および資産管理が適切になされていることを確認しました。

2014年9月21日

監査 柏木 敦 (印)

監査 高橋 陽一 (印)

第 58 回大会年度予算

収入

単位：円

| 費目 | | 予算 | 57回決算 | 備考 |
|--------------|-------------|------------|------------|---------------|
| 会費 | 58回年度個人会費 | 3,825,000 | 3,719,000 | 5000*900名*85% |
| | 過年度個人会費 | 500,000 | 371,000 | |
| | 小計 | 4,325,000 | 4,090,000 | |
| 機関誌等 販売収入 | 機関誌販売収入 | 264,600 | 348,570 | 2,646*100冊 |
| | 50周年記念誌販売収入 | 5,000 | 7,250 | 250*20冊 |
| | 小計 | 269,600 | 355,820 | |
| 雑収入 | 受取利息 | 1,200 | 1,217 | |
| | その他雑収入 | 0 | 0 | |
| | 小計 | 1,200 | 1,217 | |
| 当年度収入合計 A | | 4,595,800 | 4,447,037 | |
| 前年度繰越金 B | | 10,139,919 | 11,602,291 | |
| 収入総計 C=A+B | | 14,735,719 | 16,049,328 | |

支出

単位：円

| 費目 | | 予算 | 決算 | 備考 | |
|--------------|--------------|------------|------------|--------------------------------|--------------------|
| 大会費 | 大会運営費 | 1,150,000 | 1,150,000 | 第58回大会（日本大学） | |
| 編集費 | 機関誌刊行費 | 740,880 | 720,000 | 第57集印刷費（1,160部） 686,000+消費税 | |
| | 編集複写費 | 10,000 | 2,950 | | |
| | 編集交通費 | 550,000 | 545,840 | | |
| | 編集会合費 | 50,000 | 40,767 | | |
| | 編集通信費 | 40,000 | 32,275 | | |
| | 編集消耗品費 | 5,000 | 7,377 | | |
| | 編集謝金 | 100,000 | 64,000 | | |
| | 編集人件費 | 200,000 | 200,000 | | |
| | 編集雑費 | 5,000 | 0 | | |
| | 書評等原稿謝金 | 15,000 | 10,000 | | |
| | 書評用図書購入費 | 70,000 | 73,350 | | |
| | 振込手数料 | 1,500 | 321 | | |
| | 電子ジャーナル公開関連費 | 100,000 | | | CiniiからJ-STAGEへの移行 |
| | 小計 | 1,887,380 | 1,696,880 | | |
| 事務局経費 | 人件費 | 860,000 | 902,800 | 嘱託840,000 アルバイト20,000 | |
| | 旅費交通費 | 600,000 | 762,750 | 理事会交通費400,000 | |
| | 会合費 | 40,000 | 48,253 | | |
| | 奨励賞関係費 | 110,000 | 108,551 | 奨励賞副賞50000*2 賞状・式次第印刷費 | |
| | 通信運搬費 | 500,000 | 569,493 | 会報発送費、機関誌発送費 | |
| | 消耗品費 | 50,000 | 75,742 | ソフトウェア購入、プリンタインク等 | |
| | 印刷製本費 | 200,000 | 249,318 | 会報印刷費170,000 | |
| | 手数料 | 60,000 | 59,612 | | |
| | HP管理運営費 | 80,000 | 80,000 | ホームページ管理委託費 | |
| | 名簿刊行費 | 240,000 | 0 | | |
| | 小計 | 2,740,000 | 2,856,519 | | |
| 国際化促進関係費 | 旅費交通費 | 600,000 | 162,380 | 国際歴史学会議（中国）派遣旅費、会議旅費 英文校閲等 | |
| | 謝金 | 50,000 | 0 | | |
| | 会場費 | 0 | 0 | | |
| | 印刷代 | 20,000 | 0 | | |
| | 通信運搬費 | 20,000 | 8,630 | | |
| | 会合費 | 20,000 | 0 | | |
| | 消耗品費 | 10,000 | 0 | | |
| 小計 | 720,000 | 171,010 | | | |
| 雑支出 | 雑支出 | 10,000 | 0 | | |
| 予備費 | 予備費 | 100,000 | 35,000 | | |
| 当年度支出合計 D | | 6,607,380 | 5,909,409 | | |
| 当年度収支差額 A-D | | -2,011,580 | -1,462,372 | | |
| 次年度繰越金 E=C-D | | 8,128,339 | 10,139,919 | | |
| 支出総計 D+E | | 14,735,719 | 16,049,328 | | |

教育史学会研究奨励賞規程 現行・改正案 新旧対照表 (2014年10月)

| 改正案 | 現行 |
|--|---|
| <p>(削除)</p> <p>第<u>3</u>条 (省略)</p> <p>第<u>4</u>条 (省略)</p> <p>(附則) この規程は、第<u>58</u>回大会年度より施行する。</p> | <p>第<u>3</u>条 毎年度の奨励賞の授賞者は、おおむね4人程度とする。</p> <p>第<u>4</u>条 奨励賞の授賞者の選考は、教育史学会研究奨励賞選考委員会(以下「選考委員会」という。)が行う。</p> <p>2 選考委員会は、当該『日本の教育史学』の機関誌編集委員会の委員長、副委員長および委員長が指名する2ないし3名の委員をもって構成する。選考委員長は機関誌編集委員長を、選考副委員長は機関誌編集副委員長をもって充てる。</p> <p>3 選考は、機関誌編集委員会における論文掲載可否にかかる審査をふまえて行う。</p> <p>4 選考の具体的な手続きについては、別に定める。</p> <p>第<u>5</u>条 奨励賞は、総会において代表理事が授与する。</p> <p>2 奨励賞は、賞状および副賞とし、副賞は、金5万円とする。</p> <p>(附則) この規程は、第<u>55</u>回大会年度より施行する。</p> |

機関誌編集委員会規程 現行・改正案 新旧対照表 (2014年10月)

| 改正案 | 現行 |
|--|---|
| <p>第12条 委員会は、その事務を補佐するため、<u>編集幹事</u>を置くことができる。<u>編集幹事</u>は、<u>理事会</u>の議を経て<u>代表理事</u>がこれを委嘱する。</p> <p>付 則 この改正規程は、第58回大会年度から施行し、<u>2014年10月3日</u>より適用する。</p> | <p>第12条 委員会は、その事務を補佐するため、幹事を置くことができる。幹事は、<u>委員会</u>の議を経て<u>委員長</u>がこれを委嘱する。</p> |

コロキウムから

近代日本における教育情報回路と教育統制 (3)

一 昭和期翼賛体制と教育会の残照 一

梶山 雅史 (岐阜女子大学)

このコロキウムは、戦前における最大の教育団体・組織であった中央・地方教育会が、教育情報回路としてどのように機能したか。ほぼ70年に及ぶ活動実態と各時代における歴史的特質・意味を明らかにすることを目的とするものであり、本年度で10回目の開催となる。今年度は、明治・大正・昭和期の変遷を経て、1948(昭和23)年に全国組織としての教育会は解散するが、戦時一大翼賛団体として機能した教育会がどのように戦後を迎えたのか、歴史的転換点における教育団体の変容の解明を目指した。

梶山から上記の趣旨説明を行った後、梶山、清水禎文会員、千葉昌弘会員により3つの報告があり、この報告を受けて自由な議論、意見交換を行った。約20名の参加者と活発な議論を行うことができた。

梶山報告「昭和期戦時翼賛団体としての教育会-岐阜県の事例から」は、日中戦争の拡大とともに、地方教育会は戦時翼賛団体として皇国民の錬成を至上任務とするに至るが、その過程を岐阜県教育会雑誌の記事分析に基づきながら報告した。1930年8月、大正新教育思潮の流れを汲む「新興綴方講習会」が岐阜県女子師範学校講堂で開催され、全国から800人を越える参加者で活況を呈したが、講習会終了後、主催者の中心的教師たちは治安当局から取調べを受け、地方校へ分散左遷される。その後の綴方教育関係記事は書き手も内容も大きく変質する。また1931年9月の満州事変後、機関誌『岐阜県教育』編集者松永昇は「皇室中心主義の強張を望む」を執筆し、編集方針の明確な転換を図った。これらの顕著な事象から、1930-31年が岐阜県教育会の転換点であったことを指摘した。さらに1937年日中戦争開始とともに戦時翼賛事業に奔走する県教育会指導部の具体的動向を詳細な年表作成によって描出した。残された研究課題として、地方教育会の実質的活動を担っていた郡市教育会の分析、また県教育会を主導・支持した校長会と師範学校スタッフの分析を示唆した。

清水報告「地方教育会の終焉と戦後における教育諸団体の結成」は、群馬県を事例として教育研究活動の継承という観点から、主に1944年から1950年に至る教育会と教員組合の動向を紹介した。1947

年9月に解散する県教育会は教員組合に「一本化」し、文化的活動の継承を託すものの、教員組合は文化的活動よりも労働運動を優先させた。その結果、県レベルでの教育研究活動は、事実上ストップするに至り、教員達は郡市レベルで教育研究活動を開始する。文化的活動は郡市レベルで行われることになり、その際、戦前から戦後にかけて教育研究活動を担ってきた郡市教育会を基盤として、郡市レベルで教育会的な組織が「再建」され、戦前の研究のあり方が戦後にも継承されていたことを指摘した。

さらに、時代状況への問いを封じたままひたすら教育技法研究に邁進する教員のあり方に関して、その研究活動はどう評価したらいいのかとの重い問いが投げ掛けられた。

千葉報告「教育会の終焉-教育会から教員組合へ」は、岩手県を事例として取り上げ、教育会の前史をふくめ、1876(明治9)年7月「岩手新聞誌」から1948(昭和23)年10月復刊「岩手教育」まで岩手県教育会に関連する新聞・雑誌の書誌学的分析を踏まえ、それら紙誌の掲載記事・内容の分析から岩手県教育会の活動傾向を抽出し、最後に戦後における教育会から教員組合への転換について言及した。

梶山報告、清水報告が教育会の時期を限定した「断層撮影」的な分析であったのに対し、千葉報告は教育会の、発足から解散に至る長い歴史的展開をトータルに把握する分析手法を提示した。教育会の全体像を捉えた上で、改めて教育会とは何であったか、どういう役割を果たしたかを明らかにすべきであるとの問題提起を行った。

3つの報告後、活発な討議が行われたが、ここでは2点に絞って紹介したい。

初めに、広田照幸会員は、戦後初期の教職員組合の労働戦線の中における立ち位置研究の視点から、教育会から教職員組合への転換過程における教育活動・文化活動の位置づけについてコメントした。初期の教職員組合では教育活動や文化活動に関する局が設けられていたが、これらは全通、国労などの他の労働組合と同様、組合運動を促進するため、教育研究活動を目的としたものではなかった。しかし、教員組合は教員の組合である特性からして、次第に教育研究活動を取り入れるに至った。清水報告は教育会の側から見た教育研究活動の継承を論じたが、その歴史的動向は教組の側から見ても首肯できるものであった、との感想が寄せられた。

前田一男会員からは、清水報告と千葉報告に対して、戦前-戦後の連続性・断絶を確認するためには、組織の変遷に注目するよりも、人物の重なりや個人内在的なアプローチ個人レベルでの思想的連続性や断絶を解明する-が有効であるとの指摘があった。また、大正期には教育会の講習会や教育研究活動に対する批判的な認識が全国の教師たちを八大教育主張へと向かわせた側面があり、昭和期における地方教育会における教育研究活動の実態と質をさらに分析する必要があるとの問題提起があった。

最後に、台風による雨風の強い中、大会2日目の遅い時間まで参加していただき、充実した研究交流の場が生まれた。会員諸氏に感謝する。

東京大学における日本教育史研究の系譜

—海後宗臣を中心として—

逸見 勝亮 (北海道大学名誉教授)

寺崎昌男・駒込武・宮澤康人三氏の配布資料から摘記し、参加者の感想を添えて、コロキウムの報告に代えます。

◇寺崎昌男「東京大学における日本教育史研究の系譜と遺産—海後宗臣先生の教育事績と研究を中心に」から

I 基本的な躰 1. 実証こそ基本 (重要なのは「博搜」、偏捜は好ましくない)、2. 「博士論文は書くものだ」 3. 学生・院生を私用には使わない

II 教育史研究方法の系譜 1. ディルタイクリーク (卒論) から 2. 教育勅語研究と天皇観 3. 何のための教育史研究か

III 「研究共同」という遺風 1. 学校調査研究・郷土教育研究・青年学校研究等の先駆 2. 森有礼・井上毅の教育政策研究 3. 臨時教育会議・文政審議会・教育審議会・戦後教育改革 (頼るべき共通史料の存在)

結び 1. 近現代へのタブー視は早くから打ち払われた (吉田熊次指導による明治文化研究会への誘いというショック) 2. 東大の系譜の中での位置 (戦前東京帝国大学文学部教育学科の吉田熊次・阿部重孝・春山作樹の結節点、戦後東大教育学部創立者) 3. エネルギーの底にあったもの (研究と実践の関係、らせん状のサイクル・環流、認識と世界の「力動的関係」 4. 研究共同という遺産 (参加者の個性の多様性と問題意識の共有・討論) 5. 教育学教育への

一貫した関心 (「教育学教育カリキュラム」のスコープとシーケンスへの配慮) 6. 「転向」について (個人的学説史認識のレベル、戦後の営為との関係)

◇駒込武「寺崎報告へのコメント」から

I 海後宗臣をめぐる分裂したイメージ 1. 「反国家」「反権力」的姿勢の弱さ、あるいは不分明さ 2. 東京 (帝国) 大学教授としての小文字の権力への厳しい自覚、リベラルな態度

II 分裂しがちなイメージを統合するための、ひとつの作業仮説 1. 海後は、興亜院・CIEとの関係、東大教育学部創設の経緯を考えれば、教育制度・政策構想においても小さからぬ役割を果たした 2. 制度形成は官僚・政治家、批判は在野運動家・学者に担い手が分化し、構想知は原理性の、批判知は現実性の欠如という互いの非難にさらされる (山室信一) 井上毅との共通性がある

◇宮澤康人「海後宗臣の教育学と教育史」から

I 出発点における関心のずれ 教育学への入り方の二つの人間類型: 自己形成から vs. 次世代育成

II 海後は実証主義者ではない 教育史をではなく、教育史で教育研究をしたのでは?

III 「教育学の体系論」への志向は実学・実践関与への志向 1. 政策レベルと授業レベル両面での関与 2. 人文学ではなく、歴史社会学的 (社会科学学的ではなく)

IV 「教育事実史と教育思想史」の二分法を排す 1. 教育文化史へ 2. 政治事件史→経済史→マクロ人口動態史とミクロ社会史→ (政治・経済・家族・福祉・医療等々の) 文化史への統合

◇感想一片 寺崎報告と宮澤コメントを併せて開けたことで、確かに寺崎さん自身のほか、佐藤秀夫さん、宮澤さんには、海後宗臣の“系譜”がある、と得心できた (中略) なるほど、系譜というのは、指導を仰ぐという類ではないことは勿論、学説を継ぐ、とか、研究テーマを位置付けあう、といったものではなく、必要なエッセンスを看取もしくは体感し、かつ客観化できるところに、おのずと系譜が引かれていくのだろうか、とも感じました。

この点、オルガナイザーが「設定趣旨」で海後さんの評価 (相対的に“若手”の世代の、撰取・咀嚼、総括のあり方如何) を問うたことは、問うた甲斐のある報告だったと思います。それを受け止めるべき世代に、伝わったのかどうかは、残りますが。

◇企画者の感想 『教育学教育カリキュラム』のスコープとシーケンスへの配慮は、我が身に照らせば「汗顔の至り」。堪えました。

◇寺崎・駒込・宮澤三氏と参加者百余名の方々に、改めて敬意を表します。

コロキウムにおける東アジア教育史研究の動向と課題 荒井 明夫 (大東文化大学)

本コロキウムは、直接には、2015年夏に予定されている「国際歴史学会議」(※正式名称・INTERNATIONAL CONGRESS OF HISTORICAL SCIENCES = ICHS、於・中華人民共和国・済南)において、国際教育史学会が主宰する東アジア地域における教育史に関するワークショップでの、日本からの報告のための準備報告を用意すること、に第一の開設趣旨があり、第二には、1990年代以降の急速なグローバル化の進展と新自由主義改革の進展にあつて「政冷経熱」の状況下にある日本・韓国・中国という3つの国の関係を見据えて、我々の教育史研究はどのように進んできたのかを再検証しようとして開設した。

やや角度を変えていえば、2015年は戦後70年(同時に「日韓基本条約」締結50年)の節目の年、2016年は教育史学会設立60周年と、相次いで節目の年を迎える。

周知のように教育史学会は、その運営においても組織においても、日本—西洋—東洋と暗黙の区分の中で研究を蓄積させて来た。来年のワークショップで、我々のこれまでの成果と課題を語る時、我々には何が示せるかを探ろうとしたわけである。

報告予定の一見真理子会員が事情により欠席せざるを得ない中、新保敦子会員(早稲田大学)が、日本・中国・周辺エスニシティの東アジア認識について報告し、コメンテーターの古川宣子会員(大東文化大学)が、これまでの朝鮮教育史研究の蓄積を踏まえてその成果と課題を報告し、中国教育史研究への問題を提起された。

新保報告は、孫文に代表される中国近代化は明治日本の近代化に学ぶ中で、したがって植民者の眼差しがあり、以後の日本の植民地支配や中国共産党の政策においても少数民族を利用する要素(民族意識覚醒)が一貫してみられることを示した。

古川報告は、従来の朝鮮教育史を牽引してきた渡辺学氏を中心とする諸研究の視点と方法を詳細に分析し、「停滞論」「他律性史観」から「内在的發展論」への展開として研究の軸の推移を捉える。1990年

代以降の動向としての植民地近代化論を踏まえ、研究が朝鮮人の主体性、近代性と植民地性—その差別格差構造を踏まえた—の動態的な把握、したがって実証的な事例研究の蓄積へと進展していると評価する。最後に、古川会員は、朝鮮教育史研究を踏まえて、中国教育史研究に対して、戦前の植民地史観(蔑視論・停滞論)との格闘とその内実、戦前の日本の修身教育の取り上げ方、中国における植民地近代化論の動向、など問題提起された。

全体討論は、「東アジア教育史研究」と「東洋教育史」という用語の相違性の意味について、「民族意識の覚醒」が植民地における学校教育の中でいかになされたのか、など具体的に示す必要がある、という論点が出された。

参加人数が少なく討論の盛り上がり欠けるなど反省すべき点を残したが、新保・古川両会員の報告は、非常に大きなスケールの報告であり、それを受けての討論で重要な論点が出されたことは有意義であった。

校友会雑誌記述にみる戦前期・中等諸学校生徒のアジア認識

梅野 正信 (上越教育大学)

本コロキウムは、台湾総督府、朝鮮総督府、関東庁、樺太庁、満州国の統治下に設置された中学校、高等女学校、師範学校の校友会雑誌掲載記述を検討対象とする報告と指定討論から構成されていた。司会は斉藤利彦(学習院大学)と市山雅美(湘南工科大学)。オルガナイザーの梅野正信(上越教育大学)から、本研究が「戦前期における中等諸学校(師範学校)生徒のアジア認識に関する総合的研究」(科研(基盤B)2013年度～2015年度)によること、斉藤利彦らの校友会雑誌研究(斉藤利彦、市山雅美「旧制中学校における校友会雑誌の研究」2008年や、斉藤利彦ほかによる『旧制中等諸学校の『校友会誌』にみる学校文化の諸相の研究と史料のデータベース化 基盤研究(B)2009～2012年度科学研究費』、2011年)の発展研究であることが説明された。梅野かさは、台湾総督府、朝鮮総督府、及び関東庁、満州国の統治下における中等学校は、中学校、高等女学校、師範学校に限っても300を数えるが、台北第一中学校、京城中学校、大連第二中学校など、収集が特定の学校にとどまっていること、とりわけ朝鮮半島における収集が十分でないこと、師範学校関係の校友会雑誌の収集は台湾を除いては極めて限定

的であることが説明され、昭和初期から米英開戦に至る敗戦までの期間における、諸地域の生徒の記述・言説にみるアジアイメージの特色と構成要素について報告があった。

呉文星（台湾師範大学）からは、台南師範学校の校友会雑誌を用いて修学旅行の様相を分析した「日本統治下における台湾師範学校生徒の東アジア認識について」、徐鐘珍（東北亜歴史財団）からは、京城中学校の校友会雑誌を用いた「朝鮮総督府統治下における中等学校校友会雑誌」、歌川光一（学習院大学）からは、東京府立第四中学校の校友会雑誌を用いた「戦前期中学校校友会雑誌におけるアジア関連の記述及びその変容」の報告を受けた。このうち、呉文星報告では、1930年代の台南師範学校の修学旅行は、台湾島内と日本への旅行に分類できること、近代的施設は「東洋一」、「日本一」、「台湾一」の特徴を持つものが見学の対象となり、台湾統治の成果を確認させる傾向がみられることの報告があり、徐鐘珍報告では、朝鮮総督府の支配と時期区分、京城中学校の沿革、特徴、校風を整理したうえで、『校友会誌』の構成、「論説」部分の内容の特色について報告があった。

指定討論者である金恩淑（韓国教員大学校）は、韓国の資料が少ない現状にあっても、ほかの地域の

資料との比較研究が可能ではないか、また、教育が国民を形成するプロセスであり、朝鮮半島の日本人を育成する側面に目を向けるべきではないか、などの指摘があり、國分麻里（筑波大学）からは、京城中学校を事例とした理由について質問と指摘があった。参加者からは、京城中学校の校友会雑誌に批判的論調が少ないことの歴史的意味を丁寧に説明する必要があるのではないかという指摘、テーマにある「生徒」について、「日本人、台湾人、朝鮮人を区別せずに扱うのか」など、「アジア認識」の違いを整理する手法について意見や指摘があった。

中等学校への進学率は昭和期に入っても比較的少数にとどまっていたが、それでも大学生や高等学校生と比べれば広範な層が進学していた。中等学校生徒の素朴なアジアイメージがどのような特色を持ち、どのような要素から構成されていたのかを整理する作業は、歴史的研究の一端に位置づけられるとともに、戦後の日本及び東アジア諸国の地域社会に受け継がれたであろうアジア認識の水脈をたどる作業の一端とも、捉えることができるのではないかと。今後は、本コロキウムで得られた報告内容、指定討論者の指摘、参加者による意見や質問をふまえて、さらに各国の歴史研究者・教育学研究者との共同研究をすすめていきたい。

【第4回教育史学会研究奨励賞授与式】

総会の前に第4回教育史学会研究奨励賞の授与式が行われた。受賞者と授与論文は次の通り。

(敬称略)

樋浦 郷子

「植民地朝鮮の「御真影」－初等教育機関の場合－」

石田 治頼

『イエズス会学事規程』にみる教育とハビトゥスの形成」

受賞者の樋浦郷子会員には、新谷代表理事より賞状と賞金が授与され、受賞者のスピーチが行われた。なお、石田治頼会員は都合により欠席されたため、後日、賞状と賞金を授与することになった。



大会参加記

コロキウムに参加して

吉川 卓治 (名古屋大学)

シンポジウムを中心にみると、今大会は「自分語り」を通して研究と実践との関係を問い直す、という一貫したテーマをもっていただいているように思われる。そこでコロキウム「東京大学における日本教育史研究の系譜―海後宗臣を中心として―」の感想を拙い「自分語り」から始めたい。

寺崎昌男元会員の御報告を聞きながら私の頭に浮かんでいたのは、昨年12月に亡くなった江藤恭二先生のことである（以下、故人については歴史研究の慣らいとして敬称を略すが、江藤先生については「先生」と記す。敬称の有無が混在していささか失礼な体裁になってしまうがどうかお許しいただきたい）。江藤先生は戦後、旧制の東京大学文学部・大学院で海後宗臣に学び、野間研所員、東大助手、九州大学講師などを経た後、名古屋大学教育学部で長く西洋教育史を講じられた。私は直接の指導生ではなかったが、大学院でゼミに参加し停年直前に指導を受けたものの一人である。江藤先生は西洋教育史ゼミの中で時折「海後先生は…」と口にされた。「君たちは日本教育史の専門家と知っているかも知れないが、卒業論文はディルタイだったんだよ」と話されたことが記憶に残っている。寺崎報告を聞いてそれが「文系のディシプリン」の仮説に連なる話だったことがわかった。

報告の中でとくに興味深かったのは、天皇への敬語が使われていた『教育勅語成立史の研究』の書き換えの話である。丸山真男が「超国家主義の論理と心理」を執筆する際、学問的論文なのだから天皇・皇室に敬語を使う必要はないんだ、と自らに言い聞かせながら書いたというエピソードが想起された。一回り下の世代の丸山ですらそうなのだから驚くに値しないのかもしれないが、「書き換え」の話は海後における戦前と戦後の関係を問うことの重要性を示唆している。

報告は、「海後先生は戦後における教育学者としての責任を果たされた一人だった」と締めくくられた。戦前における海後の「市民的レベル」での国体の肯定、軍部を背景とした中国調査、国民学校の理論的先導については厳しく指摘したうえでの周到な結論だった。ただ、「戦後の営為」についての評価はなお慎重に行なう必要があるように思われる。研

究枠組みをクリークに依拠しているとの判断、戦後の大学院に対する正確な見通しの背景に戦前のアメリカでの調査経験があったのではないかとの仮説を踏まえるならば、戦後を戦前とのかかわりで構造的に捉え直すことがいっそう重要な課題として浮かび上がる。もちろんこれは私たち後進に託されたものと考えべきだろう。

最後に一枚の写真について記しておきたい。今年の3月、江藤先生を偲ぶ小さな会で映すスライドを準備するため、御遺族を訪ね学生時代の写真を何枚か拝借した。その中には自信に満ちた表情の海後の隣に好々爺然とした白髪の人物が写った一枚があった。その裏に名前が記された「上村福幸先生」とはどんな方なのだろうかとはぼんやり考えていたのだが、報告からそれが察せられたし、海後の表情が意味するものも明確になった。ご報告を務められた寺崎元会員に心よりお礼を申し上げたい。

第58回大会に参加して思うこと

鳥居 和代 (金沢大学)

私にとっては、5年ぶりの研究発表に臨んだ印象深い大会であった。昨年、この『会報』に杉村美佳会員（上智大学短期大学部）の大会参加記が掲載されたが、同じく幼い子どもを育てながら研究を続ける者として、敬意と憧憬をもって拝読した。子育てや仕事に追われて研究ができないなどと言いつつはしたくない。そう遠くない時期に、ぜひ発表しようと決意を固めたのだった。

さて、興味を引かれたのは、対象時期やテーマが近いこともあり、自分が属した第10分科会（2日目午前）の諸発表であった。私自身の発表は、戦後神戸の被差別部落問題にかなり踏み込んだ内容となった。私の今回の発表テーマともかかわる東京都の夜間中学に関する発表からは、戦後初期の夜間中学の「包摂」と「排除」の性格づけをめぐる興味深い知見を得た。1950年代の都市近郊農村の生活綴方運動についての発表は、まずそれが修士課程での報告であることに驚いたが、子どもや親同士の共感と協同を生み出す実践としておもしろく聴いた。70年代の横浜市の幼児教育・保育施策に関する発表は、「革新自治体」の教育・福祉面での課題を浮き彫りにしたもので、1人の親としても関心を抱いた。

その他の分科会でも、紙幅の都合で各々に言及で

きないが、印象的な発表がいくつかあった。それらの特長は、発表の中で引用資料をきちんと説明していることと、図表などを活用して理解しやすくレジュメを構成していることである。当たり前といえども当たりのことなのかもしれない。また、発表者が「ここがおもしろいから伝えたい」と思っている箇所には、適確な説明が加えられたり、資料の提示に工夫があったりする。考察にも熱という力がこもる。だから聴く側にも響く。

最後に、今大会に限らず、大会運営に関して素朴に思うことを書かせていただく。

1つ目は、子連れ大会参加への支援についてである。私はたまたま、本学会で試みられた過去2回の支援、すなわち2011年の第55回大会（京都大学）の託児サービスと、翌年の第56回大会（お茶の水女子大学）の託児費用半額補助の制度を利用した数少ない会員である。両大会とも司会を担当したが、子どもが0～1歳でとくに手がかかる時期だったこともあり、上記のようなサポートがなければ司会を断っていたし、大会にも参加しなかったと思う。なお、今大会については、連れ合いの協力で遠方の実家まで子どもを車で連れ帰ってもらい、私は単身、大会参加を果たした。私だけでなく、容易に身内や親戚に子どもを託せない状況に置かれている会員もおられるはずである。将来、子育てをしながら研究に従事しようとする会員たちのためにも、子連れ大会参加への支援の前例を積み重ねて、少なくともそれが途絶えることのないようにと願う。

2つ目は、ある研究者仲間が指摘してそのとおりだと思ったことだが、各分科会の〈総合討論〉の時間の不釣り合いについてである。最後の30分の総合討論は、おそらく趣旨からすれば、個々の発表の枠を超えた総合的な論点について意見を述べ合う時間として設けられていると思われる。しかしこれは実際難しい。実態としては、発表者ごとに順番に時間が与えられて、5分の質疑応答では尽くせなかった議論に充てられることが多いのではないだろうか。だとすれば、今大会は発表者が3人の会場が目立ったこともあるが、たとえば発表者が5人の場合と3人の場合とでは、30分のうち個々の発表の討論に割かれる時間に小さくない差が生じてしまう。この点をどのように考えたらよいのだろうか。

教育史学会の「熱気」と「緊張感」

山本 和行（天理大学）

「世界を「世界像」として、また問題を「問題意識」

として語ろうとする上原の思考の徹底した自己言及性は、社会的なレリバンスを生み出す駆動力となったが、その駆動力となる思考そのものを省察の審判にかけ、「道具」としての教育に近づこうとした自らを哄笑した。そのように上原思想の自己運動が俯瞰されるようにみえたとしよう。ようやくここからなのだ。上原のテキストを起点にして彼の読者による〈私語り〉が開始されるのは。」

以上の文章でまとめられた、シンポジウムにおける山名淳会員の発表は、研究を始めて10年に満たない自分のような若手研究者にとって、残された文献で何とか想像するしかない、教育史学会設立当初の教育史学の「熱気」と、その後の「緊張感」の一端に触れる貴重なものだった。

教育史学会の存在が、「教育史学」が「学」としてあることの重要な構成要素であるとするれば、どれだけの時間が経っても、学会の設立当初の、「教育史」が「教育史学」としてあろうとする「熱気」と「緊張感」を維持することが大切であろうし、自分も含めた後続の人々にとっては、その「熱気」と「緊張感」をどれほど自分のものとして自らの研究に反映することができるのかを問い続けることが課題になるだろう。自らの研究が教育史学の文脈に連なるものであるというのであれば、こうした課題をどれほど自らの研究のうちに織り込み、引き受けることができるかが問われるように思う。

また、今回の大会における研究発表を聴きながら、それぞれの研究発表に向き合うための視点のひとつは、以上の点にあるように感じた。つまり、それぞれの研究が「教育史学」の文脈に連なるものとしての意識をどれほど自らの研究のうちに織り込んでいくか、という点である。研究対象の確かな広がりや、研究方法・研究手法の妥当性、発表の構成やレジュメの作り方、フロアの反応に至るまで、具体的な形で表れる種々の達成度や至らなさは、そうした「熱気」と「緊張感」から派生するものなのではないか、と考えるのは話を広げすぎだろうか。

研究発表を通じて自らのそうした研究の姿勢を示さなければならない立場にありながら、発表せずに参加だけとなってしまったことは、大いに反省しなければならない。次の自分の発表のときに、どれほど以上の課題を引き受けることができるのか。少なくとも自らの課題として、「私が語る」うえでの課題として、そのことを意識しながら研究を進めていきたい。

教育史学会第 57 大会参加記

山梨 あや (慶應義塾大学)

今回の教育史学会では、会場を移動しつつ第 1 日午前の分科会、シンポジウム、第 2 日目の午前・午後分科会に参加し、合計 12 程度の研究発表を聞くことができた。紙幅の都合上、いくつかの研究発表とシンポジウムに言及する。

「物語るメディアとく声」による民衆教化」では、活動弁士の「声」、「語り」が批判の対象から次第に教育的効果を期待され、活動弁士自身も民衆教化、社会教育の役割を担う存在として文部省に注目されるに至る過程を丁寧に描いていた。「声」や「語り」という一回性の強い営みが、教育上いかなる役割を果たすものとして捉えられていたのかを明らかにしようとする刺激的な発表であった。

「兵庫縣古市尋常高等小学校における郷土教育の傾向と特徴」は尋常高等小学校の一次史料等を参照しつつ、郷土教育がどのような特徴を有していたのかを分析していた。フロアからは、今回の事例が、郷土教育史全体の中でどのように位置づけられるのか、また同尋常高等小学校における郷土教育衰退の原因を戦時体制への移行に求めるのは早計ではないか、といった指摘がなされた。いずれも個別具体的な事例が、教育史全体の中でどのような位置づけにあるのかを問い直すことの重要性を喚起するものであった。

「近代日本における教育自治の一形態」では、高等小学校を廃止し、実業補習学校において行われた全村教育の実践について発表された。上記の研究発表と同様、地域状況(村の産業構造や階層構造等)と全村教育の関係を問うことにより、「全村教育」一地域において実施された歴史的意味をより立体的に描出することが可能となるのではないかと考えた。

「両大戦間期の松坂屋の店員教育改革」は、松坂屋の百貨店化に伴う店員教育の変遷を検討する興味深い内容であった。発表では主要な取扱品が呉服から雑貨に拡大、転換していく過程で、従来の「裁方や積方」を中心とした職業的素養が、地理や理科、時として語学を含むものとなっていったことが明らかにされた。この動きに伴い、店員たちが次第に「裁方、積方」に戸惑いを覚えるようになったことが言及されていたが、店員の職業的「素養」から職人的要素が分離され、オールラウンダーとしての役割を求められるようになった背景なども明らかにされると、より「百貨店化」の様相を明確に示すことが出来るのではないかと考えた。

シンポジウムのテーマは「教育史研究のレリバンスを問う」であり、報告者、指定討論者より各領域の研究に立脚した刺激的な議論が展開された。大桃会員からは、教育行政史研究が、現行の教育改革の批判を相対化する視点を含む多様な選択肢を与えるとともに、歴史認識や教育を組み替える契機となり得るという「実践性」が主張された。山名会員からは、上原専祿の教育史学を手がかりに、「大きな物語」を喪失した中で教育史を研究することの意義についての問題提起がなされた。湯川会員からは、一つ一つの実証研究の成果が「放置」されている現状を問題視し、これらの研究成果を結び付け、世に問うていくことこそが教育史学会の「責任」であると同時にレリバンスなのではないかという論が展開された。

指定討論者である二井会員からは、「教育史研究者が実践を指導するというのはおこがましく、教育史研究者が実践の問いに、共同研究や分担作業という形で答えていくというイメージがより適格ではないか」という主張がされた。「実践の問い」をどのように認識し、自身の研究と結び付けていくかが教育史研究者の責任であると同時に資質であることを鋭く突いた指摘であった。森田会員からは、個々の研究成果をどのように積み重ねていくかという方法論に対する意識や、研究成果を積み重ねたその先に何があるのかを問う必要性が指摘された。報告者・指定討論者の立場は違えども、共通していたのは、教育史研究者が自身の歴史的拘束性を認識しつつ、現実の教育問題との関係性において各自の研究課題をどのように問い直し、その成果を投げかけていくかという往復運動の重要性であったように思う。司会者お二人の適格な論点の整理と報告者・指定討論者への問い直しにより、濃密かつ活発な議論が展開された。

二日目は生憎の大雨となったが、悪天候をものともせず大会の運営に当たられた事務局はじめ会員の皆様、きびきびと会場案内や資料配布をして下さった学生の方々に末筆ながら感謝申し上げます。

シンポジウムに参加して

多和田 真理子 (飯田市歴史研究所)

数年ぶりに大会に参加したところ、おそらく名札に書いた所属がもの珍しかったために、参加記を書くようお声掛けをいただいた。与えられた機会に感謝しつつ、自身のふだんの問題意識と絡めて、シンポジウムに参加しての感想を述べてみたい。

所属機関である飯田市歴史研究所における調査研

究活動の使命は「地域への成果の還元」である。だがいったいそれは何だろう。地元の方と協力関係を結びつつ調査をすることか。報告会を開き、研究発表をしていくことか。もちろんそれらも含まれるだろうし、実際、研究所では積極的にそういった機会を広げてきた。だが、それ（だけ）でいいのか、それが地域の方たちにいったい何をもたらすのか、という迷いは常にある。今回のシンポジウムに参加して、自分つまり「レリバンス」を問うていたのだと気づいた。自身の研究と、地域の人々の生活とのレリバンスを。

最近考えるのは、私の研究が地域の人々にいかなる影響を与えるか、何を示唆しうるか、という問いに明快な答えを出すこと、出せると考えることこそ、実は傲慢ではないか、ということである。「地域の人々」といっても多様であり、それぞれが固有名と履歴をもち、現在を生きている。一括りにはできず、一様に響く言葉などはない。もちろん、だからレリバンスなど問わなくてもよい、という意味ではない。研究者としては、地域の人々との関わりを持ち続け、レリバンスを志向し続けながら、自身の関心にもとづいて、誠実に研究を進めていくしかないのではないか。地域の人々は、各々の関心によってその「成果」を受け取り、何かしら響くものがあれば応答してくださるだろう。忘れてはいけないのは、つねにレリバンスを志向し続ける姿勢そのものだと思う。

このことを、今回のシンポジウムに関連してとらえ返してみたい。趣旨説明文では、レリバンスの対象である「教育事象」や「実践」について、あえて意味を限定せず広く捉えていた。それ自体はいいと思う。しかし実際には、誰の／どういう事象や実践に対する、誰の／どういう教育史研究なのか、によって議論がまったく違ってくるはずだ。シンポジウムでは、その想定が論者により異なっていたために、話の焦点がぼやけてしまったのではないだろうか。

また、当日の議論では「教育史学会設立趣意書」の言葉にそって「煉瓦」（各自の研究成果）と「塔」（総合教育史）の比喩が取り上げられ、「通史」についての意見が交わされていたが、これは「全体史」の視座に通じる議論だと思った。近世史研究者の吉田伸之氏は地域史研究に関して、「地域の絶対的な個性」を明らかにすることは決して「個別の研究分散化」を招くのではなく、それを基礎としてこそ「全体社会の全体史叙述」がなされうると述べている。ある地域の「個性」を描くには、必ずその外部を描き、歴史的变化を描き、その変化をもたらす外の力について描き出さなければならないだろう。そう

やって目線を移していくと、先の比喩に戻れば「煉瓦」はそれひとつで転がっているのではなく、「塔」の一部としてそこにあるということではないか、などと考えていた。

シンポ以外にも、諸報告に知的刺激を受けつつ、自分自身はいまだろくな「煉瓦」も作れていないことを痛感し、今後いっそう精進しなければとの意を新たにしたい学会であった。

参照：吉田伸之「地域史をめぐる二・三の論点」（地域史惣寄合呼びかけ人編『飯田市歴史研究所年報別冊 地域史の現在』2010年）

大会参加記

久恒 拓也（広島大学大学院）

まず、教育史学会入会から年数の浅い筆者に、参加記を執筆するという稀有な機会を与えてくださった清水禎文会員に感謝申し上げる。

大会への参加は、本大会を含め3回目となる。前年と今年は発表者として臨んだ。発表は自身の体調不良の影響もあり、スムーズにいったとはとてもいえなかったが、司会の先生方を中心に、多様な角度からのご意見をいただいたことは救いとなった。普段狭い部分にこだわり過ぎて、周囲を見渡せなくなっていることに気づかされる重要な30分+ α だったのではないだろうか。同じ戦後史を研究領域とする報告で構成される部会であるが、内容は実に様々かつ濃厚であり、それらを把握するのにかなり必死だった印象が強い。あらためて教育史学の汎用性の高さを認識したといえる。

一番刺激を受けたのはシンポジウムである。副題の「教育史研究のレリバンスを問う」に筆者はかなり惹きつけられた。3名のご報告と、指定討論者2名のご意見は大変貴重なものであった。しかしながら、その後のフロアをまじえた討論の中では、レリバンスについてのやり取りが乏しかったように感じた。質問紙の提出を試みたが、記述が要領を得ていなかったか、適切性を欠いていたからか使われはしなかった。要約すると、「教育史研究が諸実践にどう影響を与えてきたのか、ということ自体を検証する研究が進められるべきでは？」という内容である。

そのようなことを（教育史研究者が）するのは妥当なのか、筆者にとって判断は容易でない。そもそもレリバンスを問われる事態になったのは、教育史の実践的な側面も含めた存在意義が、教育史以外のフィールドに向けて十分説明されてこなかったからではないかと考える。だが「史哲」の存在意義と

正当化論理は…中略…「史哲」内部の自己省察によってもたらされるべきもの」(山名会員の報告レジュメ、p.1)であるならば、その省察の集積こそが教育史研究のレリバンスの根拠になり得るはずである。ゆえに教育史研究に長く携わっておられる登壇者の方々に、省察の方向性を多様に論じていただきかったというのが正直なところである。

教育史研究というものを、少し引いた位置からみて考えることは重要であると考える一方、答えを出すのが困難な作業でもあるだろう。シンポジウムで結論に達しにくい議論をすることは適切でないという声もあろうかとは思いますが、今後是非レリバンスに関しては継続的な討議を望んでやまない。

第 58 回大会に参加して

田中 達也 (川口短期大学)

教育史学会第 58 回大会に参加した。教育史学会に参加したのは 2 年ぶり、自由研究発表を行ったのは 3 年ぶり 2 回目である。現在のオーストリアの高等教育に関する研究発表が多いため、教育史の研究発表は非常に新鮮な感覚を持った。

今回の発表は、部会がドイツに関連した研究発表のみであった 3 年前よりも緊張した。それは、私が発表した第 6 分科会は発表者が(私を含めて) 5 名と多かったことと、他の研究発表が全て英米系であったためであった。分科会で興味を持ったのは、大学史を扱った 2 つ目の中村勝美会員と 4 つ目の坂本辰朗会員の発表である。中村会員は、ロンドン大学の学士学位試験改革についての発表であった。19 世紀は、ドイツのベルリン大学のように世界に影響を及ぼした大学だけではなく、産業革命に対応した単科大学が設立された激動期であったため興味深く感じた。坂本会員は、1920 年代における大学のアクレディテーションに焦点を当てた発表であった。現在は、日本だけではなく世界中で大学の質保証が求められる時代であり、その原点であるアメリカについて学ぶ良い機会であった。

私の発表は、大学の法的地位を規定した 3 つの組織法を比較することを試みた。しかし、1918 年以前のハプスブルク君主国(総称はオーストリア=ハンガリー帝国であるが、法的には、「帝国議会に代表を送る諸王国と諸州」と「ハンガリー王冠下の諸州」とが向かい合って存在していた)の法律と、1955 年に成立した第 2 共和政オーストリアの法律とを比較することは簡単ではないと感じた。それは、前者は神聖ローマ帝国以来の伝統のある古い帝国で

あるのに対し、後者は新国家であるためである。

このような事情で 1918 年を境に 2 つに切り離さなければいけないことがオーストリアをはじめとする中東欧諸国の教育史研究が容易ではない要因なのかもしれない。もっともオーストリアは継承国家であるために、2 つを強引にでも繋げようとする研究が多いだが、このことをずっと考えている内に発表日が来てしまった。

今回の部会の研究発表は、西洋教育史について学ぶ貴重な機会であるとともに、教育史研究の重要性を感じた。確かに文献を収集するのが容易であるとともに、論文としてまとめやすいため、現在の教育に比重が傾きがちである。しかし、大学・教育の将来について考えるための材料として教育史は必要ではないだろうか。

第 58 回大会参加記

高野 秀晴 (仁愛大学)

本学会の大会に参加し始めてから約 15 年になる。最初は独特の雰囲気委縮させられ、少し慣れてきてからは傍観者の気分となってしまう、そして教員になってからは、議論の場からすっかり遠ざかってしまっていて、発言しようにも言葉を見失いつつある。

そんな中、今年の大会で私は初めての体験をした。それは大会一日目。討論の時間に挙手をするという体験である。これまでも挙手しようとしたことはあった。ところが、勇気が出ず、逡巡するうちタイミングを逃すということが何度かあった。そんなことを繰り返すうちに、勇気を出そうとすら思わなくなってしまい、今に至っている。ところが、どうしたわけか今年は、気がつけばすでに手を挙げてしまっていて、マイクを渡されてから動揺する始末。「早く発言を終えなければ」という焦りから言葉足らずの質問になってしまい、発表者の方に申し訳なく思う、そんな初体験だった。

それにしてもこれはどうしたことなのだろう。なぜ挙手をしたのか。「いい加減、新入気分ではいけない。主体的に参加しなければ」という責任感なのか、「もはや逡巡は不要。私の発言は意味深い」という驕りなのか。それとも、単なる自己アピールに過ぎないのだろうか。

少し考えて、いずれでもないような気がしてくる。もっと単純なことなのかもしれない。「討論をしてみたい」—要は議論に飢えていたのかもしれない。

年に一度、各地から会員が集う大会は、議論の場としてとても貴重であることはおそらく間違いな

い。そんな貴重な時間が沈黙で終わるのに耐え兼ねて、気がつけば手を挙げていたということらしい。もちろん、発表が面白かったからこそであることは言うまでもない。いい発表が聞けてよかったなあと思った。

大会二日目は主に前近代日本に関わる発表を拝聴した。一日目に前述のような私的事件が起こり戸惑ってしまったため、二日目は再び黙り込んでしまった。いや、正直に言うと、日頃の不勉強がたたなり、史料を読むのに時間がかかってしまい、ようやく読み終えた頃には、すでに討論の時間が終わっていたというのが実際だ。こうして、毎回のことだが、自分の不勉強を反省させられることになる。徐々に史料に接して疲れてしまい、「ちゃんと史料読まなきゃ」とつぶやき家路につく（はずが、たいがい寄り道してどこかで呑む）。それは今年も同様であった。

最後になりましたが、本大会のスタッフの皆さんにお礼を申し上げます。雨で冷える中、駅前で道案内していただいたり、一人一人の目を見ながらレジュメを配っていただいたりなど、配慮に満ちたご対応に感謝いたします。

第 58 回大会に参加して

井上 快（広島大学大学院）

2014年10月4・5日の両日、日本大学にて開催された教育史学会第58回大会に参加した。まずは、大会を企画・運営して下さった準備委員の皆様、日本大学のスタッフの皆様に心より感謝申し上げたい。

大会では、多くの研究発表を拝聴し、勉強させていただいた。特に橋本美保・湯川文彦両会員の発表では、研究に対する姿勢を教えていただいた。橋本会員の発表では、史料と真摯に向き合うことの重要性を教えていただいた。それはフロアとの討論からも顕著にうかがえた。湯川会員の発表は、明治期教育行政に関するこれまでの通念を打破・拡大するもので、その発想の鮮やかさに憧れを抱いた。

またシンポジウムからも重要な知見を得ることができた。シンポジウムのテーマは「教育史は現実の諸実践にどう影響をもちうるか—教育史研究のレリバンスを問う—」であった。冒頭で湯川嘉津美会員が「〇〇を明らかにすることを目的とする」研究が増えているとの危惧を示された。私自身、昨年度執筆した卒業論文では、湯川会員の指摘の通り、レリバンスを作らずに満足しており、これからも教育史を研究していきたい私にとって避けては通れないテーマであった。議論は、歴史的研究方法は実証か、解釈かという問題を中心に展開されていた。

しかし、自らの研究に対する批判的検証は教育史に限ったことではないように思う。史学大会の翌週にスタッフとして日本教育方法学会に参加した際も、自学問を問い直す課題研究、シンポジウムが見られた。全ての分野の研究ないし知識に実用性が求められている。実用性を求めて、一部の研究ばかりが盛んになり、結果として学問の多様性が失われることは深刻な問題である。この問題を新自由主義の弊害と位置づけるならば、教育史は他の学問分野と協力し、新自由主義を乗り越えるよう働きかけなければならないだろう。教育実践にとどまらず、社会に影響を与え続ける研究こそ、私の憧れる教育史研究である。

懇親会の際に、何名かの会員とシンポジウムの内容についてのお話することができた。その際、シンポジウムでは議題に上がらなかった意見も多く交換された。報告者の意見をじっくりと聞くことも重要だが、せつかく多くの研究者が集まるのならば、多様な意見を皆で共有するのも良いのではないかと、とも思った。

あっという間に過ぎた2日間であったが、夏休みの最後として存分に楽しませていただき、また後期セメスターの始まりとして活を入れていただいた。極上の体験を提供して下さった準備委員の皆様、日本大学のスタッフの皆様に再度心より感謝申し上げます。

第59回大会(2015年9月26日～27日)のご案内

この度、2015年度の第59回大会を宮城教育大学で開催することになりました。日程は9月26日(土)～27日(日)を予定しております。季節は確実に秋ですが、日中はまだ夏の余韻が残るころ、一方で朝晩にはやや肌寒さを覚えたりする時節になります。

事務局から開催の打診があったときにまず思ったことは「無理だろう」ということでした。なによりも宮教大には教育史学会の会員が2名しかおりません(佐藤哲也さんと笠間)。アルバイトの主力になってくれる大学院生のリクルートも難しく、さらに市内中心部からの交通の便もよろしくないこと(バスの便数が少ない)、等々の理由からでした。ただ、交通の便の悪さは、現在工事中の仙台市地下鉄東西線の早期開業を願うしかないとしても、他の条件の悪さは工夫を凝らすことで何とか克服できるだろうということで、開催をお引き受けいたしました。幸い、近隣大学の会員の方々のご協力を得て準備委員会を組織できそうなので、事務局を宮教大に置く体制で準備に当たっていきたく思っております。仙台での開催は、2005年の第49回大会(東北大学)以来になりますので、ちょうど10年ぶりになります。

宮教大は、来年、創立50周年を迎えます。陸軍

幼年学校の跡地に仮住まいして開学したのが1965年、現在の青葉山に移ってきたのが1968年になります。「旧帝国大学における教員養成」の経験を経て、「目的大学化」の先陣を切る(切らされる)形での開学だったことは、教育史の事実として知られているところです。現在は、木々が繁茂し、早朝にはリスが闊歩する自然豊かなキャンパスですが、当時の写真を観ますと、荒々しく削られて露出している山肌の脇に建物が並んでいる光景が目飛び込んできます。50年という時間が経過したにもかかわらず、各学部に分属して専門教育を受けた学生たちへの指導の実際がどうだったのかという「旧帝国大学における教員養成」の内実の解明は、必ずしも進んでいるとはいえないのではないかと思われます。

そんな、歴史の一コマを構成する宮教大ですが、準備委員会としましては、多くの方々にご参加いただき充実した研究報告で満たされる大会となるよう、努力してまいりたいと思っております。会員のみな様にもぜひご協力をお願い申し上げる次第です。

第59回大会準備委員会
笠間 賢二(宮城教育大学)



シンポジウム



分科会

* 図書

- ・府女専資料刊行会『大阪府女子専門学校十年史草稿 付 見学旅行資料・戦時期学校日誌』大阪公立大学共同出版会 2014/3/31
- ・鄭在哲著・佐野通夫訳『日帝時代の韓国教育史 日帝の対韓国植民地教育政策史』皓星社 2014/4/19
- ・辻本雅史編著『論集 現代日本の教育史 7 身体・メディアと教育』日本図書センター 2014/5/25
- ・森田猛『ブルクハルトの文化史学—市民教育から読み解く—』ミネルヴァ書房 2014/6/10
- ・橋本伸也・沢山美果子編『保護と遺棄の子ども史』昭和堂 2014/6/20
- ・齋藤慶子『「女教員」と「母性」』六花出版 2014/6/30
- ・佐野誠『戦前の社会教育論と補習教育 個人の自由か社会規範か』ブイツーソリューション 2014/6/30
- ・桜井恵子『近代日本算術教育史—子どもの「生活」と「主体性」をめぐる—』学術出版会 2014/7/25
- ・小笠原道雄・田中每実・森田尚人・矢野智司『日本教育学の系譜 吉田熊次・篠原助市・長田新・森昭』勁草書房 2014/8/25
- ・福崎信行『わが国実務教育の魁 山下谷次伝』人間社 2014/8/28
- ・神辺靖光編著『明治前期中学校形成史 府県別編 III 東日本』梓出版社 2014/9/10
- ・小林千枝子『戦後日本の地域と教育—京都府奥丹後における教育実践の社会史』学術出版会 2014/9/25
- ・大戸安弘・八鍬友広編『識字と学びの社会史—日本におけるリテラシーの諸相—』思文閣出版 2014/10/5

* 紀要・ニューズレターなど

- ・『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』第76号 慶應義塾大学大学院社会学研究科 2013/12/20
- ・『近代教育史叢書 1 東海大学教育研究所個別プロジェクト研究 明治期の村落小学校関係資料集—栃木県安蘇郡閑馬小学校—』情報史科学研究所 2014/1/10
- ・『近代教育史叢書 2 東海大学教育研究所個別プロジェクト研究 栃木県安蘇郡閑馬村・閑馬小学校資料目録』情報史科学研究所 2014/1/10 改訂版発行
- ・『日本仏教教育学研究』第22号(特別号) 日本仏教教育学会 2014/3/30
- ・『玉川大学教育博物館紀要』第11号 玉川大学教育博物館 2014/3/31
- ・『教育学論集』第10集 筑波大学大学院人間総合科学研究科教育基礎学専攻 2014/3/31
- ・『大学教育学会誌』第36巻第1号 大学教育学会 2014/5/20
- ・『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』第77号 慶應義塾大学大学院社会学研究科 2014/5/25
- ・『教育学研究』第81巻第2号 日本教育学会 2014/6/30
- ・『教育社会史史料研究』第7号 教育社会史史料研究会 2014/7/30
- ・『研究室紀要』第40号 東京大学大学院教育学研究科基礎教育学研究室 2014/7/31
- ・『玉川大学教育博物館館報』第12号 玉川大学教育博物館 2014/8/31
- ・『大学教育学会ニューズレター』No. 97 大学教育学会 2014/9/18
- ・『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学)』第61巻第1号 名古屋大学大学院教育発達科学研究科 2014/9/30
- ・『武蔵大学人文学会雑誌 平林和幸教授追悼号』第46巻第1号 武蔵大学人文学会 2014/10/10

事務局からのお知らせ

1. 「日本の教育史学」第57集の誤植について

「日本の教育史学」第57集（2014年10月1日発行）の奥付に誤植がありました。詳細は、本会報同封の正誤表をご確認ください。関係者のみなさまには深くお詫び申し上げます。

2. 会費納入のお願い

2014年9月より第58回大会年度がスタートしました。今年度会費および過年度会費をお支払い頂いていない会員の方には、振り込み用紙を同封させていただきました。すみやかな納入にご協力ください。

年会費は「ゆうちょ銀行」からの自動引き落としにより納入できます。会員の便宜と事務効率化のため、極力ご協力をお願いします。なお、ご協力いただける方は事務局までお申し出ください。必要書類を送付させていただきます。

3. 会員登録について

今年度は名簿刊行年ですので、本会報に住所変更等の情報は掲載しておりません。同封の会員名簿が最新の登録情報ですのでご確認ください。

なお、11月15日現在、次の方が住所不明となっています。お知り合いの方がいらっしゃいましたら、事務局までご一報くださるようお願いください。会員登録内容の変更は、ご本人からのお申し出によってのみ変更が可能です。

| | | | |
|-------|--------|------------------------------|--------|
| 歌川 光一 | 佐久間 正夫 | Stevenson III William Robert | 前川 直哉 |
| 常本 勇治 | 蛭田 道春 | 青山 鉄兵 | 梅本 大介 |
| 加納 史章 | 菊地 愛美 | 北川 茂伸 | 財部 美香 |
| 吉川 友能 | | | 長岡 仰太朗 |

(順不同・敬称略)

2014年11月
事務局長 八畝 友広

教育史学会 会報 No. 116 2014年11月25日

編集・発行 教育史学会事務局 八鍬友広
〒980-8576 仙台市青葉区川内27-1
東北大学大学院教育学研究科
八鍬研究室 気付
電話 022 (795) 6117
電子メール mail@kyouikushigakkai.jp
郵便振替口座 00140-0-552760 教育史学会事務局

印 刷 城島印刷株式会社